

テーマ:身近な物品写真を使うコミュニケーションアプリ

■ 背景

- 脳卒中やALS(筋萎縮性側索硬化症)の患者さんは、麻痺により手指等の動きが鈍くなり、徐々に固まっていく。
- その際、看護師やご家族とのコミュニケーションには色々な手段が使われており、手指等が固まってしまう前は発話できなくても画面入力で伝えるツールを使用したり、固まってしまった後でも患者さんの視線で入力するものなどが開発されてきている。
- これらは、例えば取って欲しいものがある場合、抽象的・一般的な表現(コップリ)になってしまい、患者さんと聞き手のコミュニケーションがとりにくい場合がある。



【現状のコミュニケーションツール】

■ 現在の状況、対応方法

- 現状は、右上図のような視線入力機器が使われることがあるが、抽象的・一般的な表現(コップリ)を使ったり、予め用意された既成の絵や写真が使われることが多い。
- 在宅時は家庭のそれぞれの工夫で患者さんとの意思疎通がなされているのが現状である。

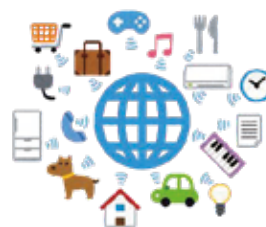
■ 現在の課題

- 現状は、右上図のような視線入力機器が使われることがあるが、抽象的・一般的な表現(コップリ)を使ったり、予め用意された既成の絵や写真が使われることが多く、患者さんにとっては表現が難しい時がある。
- 在宅時は、特に家にある‘モノ’と表現する‘モノ’が合致しない(聞き手が判断しづらい)ような場合もある。

■ 使用頻度や市場性(マーケットサイズ)

- 「伝の心」(日立ケーイーシステムズ社製:定価約45万円)
- 話想(企業組合S.R.D社製:定価約45万円)
- オペナビTT(テクノツール社製:定価約77万円)
平均約50万円として全患者さんが使うとすると、
- ALS患者数 約1万人(日本)=50億円
出典:<https://www.nanbyou.or.jp/entry/1356>
- ALS患者数 約40万人(世界)=2,000億円
出典:<https://prt看times.jp/>

■ 解決策案の例(イメージ図)



<出典:いらすとや>

機能アイデア例

- 家にある‘モノ’を登録できる機能
- 患者さんが選び易い機能
- 聞き手に分かりやすい表示ができる機能

■ リハビリテーション部ホームページ

http://www.shiga-med.ac.jp/hospital/doc/departament/central_clinic/rehabilitation_dep/index.html